

## 2024 年度 JESMA 研究支援制度 研究成果報告書

研究課題名：産後養育者感情の個人内変動機序の解明

名古屋市立大学大学院医学研究科

平岡大樹

### 背景

周産期は養育者の感情やメンタルヘルスが劇的に変化する重要な時期であり、特に産後うつや児へのボンディング（絆感情）の障害は適切な養育を妨げ、親子双方の心理的健康や発達に影響を及ぼすことが知られている。これまでの研究は主に個人差に基づく個人間変動に焦点を当ててきたが、個人内での感情相互作用の機序は十分に明らかにされていない。本研究では、経験サンプリング法を用いて産後養育者の感情を日内レベルで測定し、個人内における罪悪感、絆感情、抑うつ症状の関連性を検討することを目的とした。

### 方法

2025 年 8 月時点において、産後 1～2 か月の母親 299 名（平均年齢 = 33.7 歳，SD = 4.1）からのデータ収集を完了した。参加者には LINE（Exkuma システム）を通じて調査用メッセージを配信し、1 日 5 回の調査に回答を求めた。測定項目は、母子絆感情（2 項目）、産後うつ症状（3 項目）、罪悪感（1 項目）であり、その時点における各感情や心理状態を短時間で報告できる形式とした。

本研究は名古屋市立大学大学院医学研究科の倫理審査委員会の承認を得て実施された。すべての参加者から調査実施前にインフォームドコンセントを取得した。

解析ではまず、マルチレベル媒介分析を用いて、罪悪感が母子絆感情から抑うつ症状への効果を媒介すると仮説を立て、同時点的な媒介過程を個人内レベルで検討した。第二に、ランダム切片交差遅延パネルモデル（RI-CLPM）を適用し、母子絆感情、抑うつ症状、罪悪感の縦断的かつ双方向的な関連を明らかにした。

### 結果

マルチレベル媒介分析の結果、同時点において絆感情が一時的に低下すると罪悪感が高まり、その罪悪感の高さが抑うつ症状の増大と関連していた。すなわち、絆感情から抑うつ症状への間接効果が同時点で有意に認められた。また、絆感情から抑うつへの直接効果も小さいながら同時点で有意であった（図 1）。

RI-CLPM の適合度は概ね良好であった（CFI = 0.950, RMSEA = 0.060）。交差遅延効果については、罪悪感が高いと次時点で絆感情が悪化する経路（ $\beta = 0.183, p = .001$ ）と、抑うつが次時点の罪悪感を高める経路（ $\beta = 0.186, p = .003$ ）が有意であった。一方、絆感情から抑うつ（ $\beta = 0.073, p = .129$ ）および抑うつから絆感情（ $\beta = 0.034, p = .578$ ）の経路は

いずれも有意ではなかった（図2）。

### 考察

同時点のマルチレベル媒介分析では、絆感情の低下が罪悪感の上昇を通じて抑うつの上昇と共起することが示された。一方、RI-CLPM では、前時点の抑うつが次時点の罪悪感を高め、さらにその罪悪感が次時点の絆感情の障害を悪化させるという方向性としては逆向きの過程が示された。これは、瞬間的には「関わりの実感（絆）→自己評価（罪悪感）→気分」という共起が強いのに対し、時間を隔てると「気分（抑うつ）→反芻的自己非難（罪悪感）→関わりの質（絆）の低下」という過程が相対的に支配的になることを示唆する。以上より、産後支援では、瞬間的な関わりの躓きに伴う気分低下への即時的支援に加え、抑うつに伴う反芻・自己非難が遅れて関わりの質を損なう可能性に留意し、時間差でのフォローアップ介入を設計する意義が示唆される。

なお、本研究は妊娠中からのリクルートを行った関係で、研究参加への同意済みでありながら調査がまだ実施されていない参加者が少数存在しており、本稿の結果は暫定的なものである。本研究の途中経過については、2025 年度赤ちゃん学会第 25 回学術集会および日本心理学会第 89 回大会にて発表し、フィードバックを受ける予定である。最終的なデータが揃い次第、学術誌への投稿を予定している。

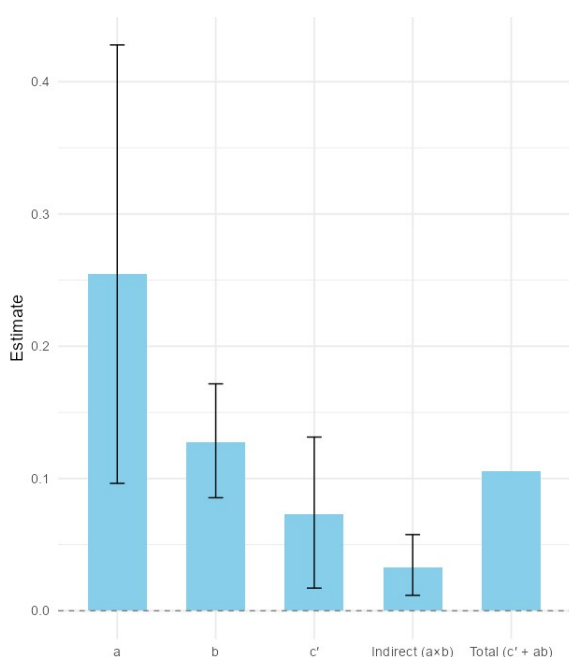


図1. マルチレベル媒介分析における同時点での媒介効果の推定値と 95%信頼区間

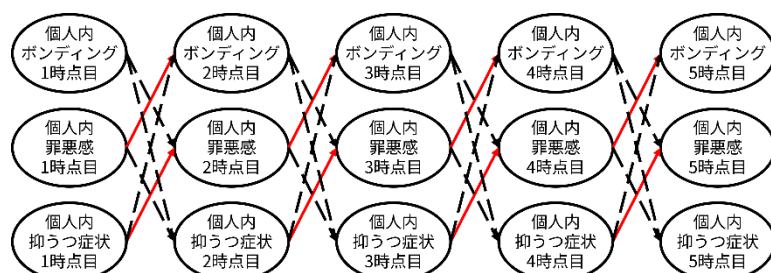


図2. RI-CLPM による産後母親の絆感情・罪悪感・抑うつ症状の縦断的相互関連。図中の赤矢印は有意な交差遅延効果を示す